

新編 知立市史だより

第3号



市史編さん民俗部会では、さまざまなまつりの調査を行いました。知立まつりでは、5台の山車が奉られますが赤瓢箪とお神輿の巡行も見逃せません。赤瓢箪の前には邪気祓いの木鉾が進みます。

本楽（5月3日）では午後2時に山屋敷町のお旅所を出発、約1時間半かけて知立神社に向います。日頃は多宝塔の中で出番待ちですので、まつりの間に是非見てください。

自然部会が中間発表会を行いました

○発表会 平成24年8月5日(日)

知立市図書館2階、視聴覚室

午後1時半～4時 (参加者 35名)

○展示 同1階展示コーナー 8月5日～12日

自然環境の変化を知る基礎資料

平成22年度に知立市史編さん事業が発足してから3年目を迎え、自然部会では平成29年度の発刊に向けて精力的に調査・解析を進めています。市史編さんにおける自然部会の役割は、知立市の現在の自然環境の現状を把握することが主な目的です。今回の調査・解析結果は、現在の知立市における自然環境の維持・保全のみならず、今後の環境変化を知るための基礎資料となるものです。

自然部会は、部会を総括する編集委員(自然部会長)と気候・気象、地形・地質、植物、および動物の4分野が各1名の調査執筆委員と複数の調査協力委員で構成されています。特に、動物分野では多くの方が調査に参加されていて、自然部会では分野単位での活動が主体となっています。このため、各分野の活動状況を部会構成委員が全員で把握する体制にはなっていないのが現状です。



中間発表会について説明する大和田自然部会部会長

そこで自然部会では、各分野の調査内容を部会全体で把握するため、知立市図書館2階視聴覚室で、平成24年8月5日の午後からこれまでの調査・解析結果、および進捗状況を一般市民も含めて公表する中間発表会を開催いたしました。開会にあたり、川合教育長から「市史は過去から現在までの過程を知り、未来を予測するもの」との言葉を受け、各分野が発表と質疑・応答で30分間、4分野で7つのテーマ発表と知立東高校の生徒による生物調査報告も含め、約2時間半にわたって熱心な発表と質疑がなされました。

まず、前半は気候・気象分野担当の大和田春樹調査執筆委員から「知立市における暑さ・寒さの考察」と題しての発表があり、他都市と比較しても知立市は夏の暑さが厳しいとの調査結果の報告があり、市民の意識との違いを感じました。また、地形・地質分野担当の堀



熱心に聴講中の参加者（中間発表会）

和明調査執筆委員からは、「知立の地形・地質」と題して既存資料による碧海台地（面）の分布と柱状図による形成過程についての説明がありました。

後半では、植物分野を担当する堀田喜久調査執筆委員が「知立の野生植物について」と題した発表で、平坦な地形で市域約16平方キロメートルの知立市でも、現段階で70種以上の野生植物の存在を確認したとの報告がありました。さらに、動物分野では小鹿亨調査執筆委員の「知立の野鳥・クモ類・カエル類」の発表を筆頭に、小鹿登美調査協力委員の「知立の哺乳類など」、金田吉高調査協力員・山田昌幸資料整理員の「知立の昆虫」についての精力的な活動・調査報告があり、最後の質疑では知立の植物や動物の分布にも地球温暖化による影響や外来種を危惧する意見が出されました。

このような生態系の現状を踏まえ、生物分野に特別参加した知立東高校の生徒からは、「知立東高校付近の猿渡川に生息する外来生物について」の調査報告がありました。また、発表会終了後には知立



食い入るように標本を観る来訪者（展示コーナー）

高校から市民への蝉の生態調査の協力依頼があり、市史編さん事業への市民の関心の高さを感じました。

さらに、発表会に参加できなかった市民の方々のために、中間発表会が開催された8月5日から約1週間、図書館1階展示コーナーに自然部会の活動状況がわかる写真や標本、図表などの展示を行い、広く市民の方々にご理解いただけるように配慮しました。今後とも市民の皆様の調査活動へのご理解とご支援、ご協

力をお願いいたします。

（愛知教育大学名誉教授 大和田道雄）

別巻「文化財編」が加わります

別巻「文化財編」をお楽しみに



『新編知立市史』に別巻「文化財編」が新たに追加されることになり、私はその編集責任者として文化財委員長を拝命しました。市史編さん事務局の方々の精力的な取り組みによって市内の文化財悉皆調査も完了し、私どもが取り組むべき文化財の全貌も明らかになりました。今後は掲載候補を中心に専門家による本調査を進め、平成26年度の刊行を目指します。

伊勢物語の歌枕の地として、あるいは繁栄した宿場町として、知立には多くの文化財があります。それらを目の当たりにする時、市民の皆さんは地域の歴史や伝統の重みを強く実感されることでしょうか。文化財は歴史と伝統の生き証人なのです。紙や布・木といった弱い材質の文化財が、湿気の強い風土の中で生き延びてきた背景には、それを守り伝えてきた人々の尽力があったことを忘れてはなりません。文化財が現存するということは、長い歴史の中で、この尽力が途絶えることがなかったことを示しています。私どもはこれからの調査の中で、そうした皆さんの、脈々と続く誇り高い営みに接することを楽しみにし

ています。そして「文化財編」が、この営みを広く市民の皆さんにお伝えする一助となることを願っています。皆さんのご理解とご支援をお願い致します。

(愛知教育大学准教授 鷹巢 たかす 純)

○文化財委員 (敬称略・五十音順)

委員長 鷹巢 純 (絵画)
 委員 愛甲昇寛 (金石文)・池内 敏 (歴史)・風岡正明 (書跡)・加納克己 (文楽からくり首)・神谷 浩 (絵画)・鬼頭秀明 (文楽からくり・神輿)・小池富雄 (無量寿寺長線)・清水正明 (考古)・杉野 丞 (建築)・田邊三郎助 (工芸の一部)・水野智之 (歴史)・見田隆鑑 (彫刻)

かしらの調査を行いました

知立山車文楽の首 (かしら)

首と書いて「かしら」と読む。今は、頭と胴体のつなぎ目をいうが、元々、「首」と言う字は、「首」(顔)の上に「𠂔」髪を載せた字である。故にかしらの事は、首と書くのが本来である。

首の製作法は、次のように変遷した。

①古いカシラは、頭と頸くびが一体で作られ、くり抜かれていない。

- ②次に、頭と頸が一緒だが、中がくり抜かれる。
 ③その次は、頭の中がくり抜かれ、頸が別でうなずきができるようになる。うなずきは、クジラのヒゲのしなう棒で行う。
 ④最後に現在の文楽のように頭と頸は別でクジラのヒゲの板バネと糸でうなずきをさせるようになる。

つまり、操り人形の首は、四段階で変化してきた。これまでは、知立の山車文楽のかしらは、最後の④のものしかないと思われてきた。知立の祭祀記録には、一六五三年に祭りが始まって、その九四年後の一七四七年以降にしか山車文楽は出てこない。が、今回の調査で、①②③の段階の古いものも発見され、知立山車文楽が、祭りの始まった当時から行われていたことが、首から判断できた。

浄瑠璃とは、浄瑠璃姫と牛若の古い語り物で、江戸時代に入る頃に、三味線や操り人形と結びついて人形浄瑠璃となり、様々な語り物が作られた。古い人形浄瑠璃の時代は、太夫毎に独特な節をもち、丹後節とか薩摩節とか太夫の名毎に呼ばれた。和泉太夫に代表される金平浄瑠璃といわれるものは、坂田の金時の子、金平が大活躍する活劇もので、一世を風靡し、首も勇猛な顔立ちのものであった。キンピラ牛蒡ごぼうの名は、誰でも知っていると思うが、牛蒡を食べると金平のように、力がわくというので、ついた名であり、金平浄瑠璃から来ているのである。



金平かしら



文楽風かしら

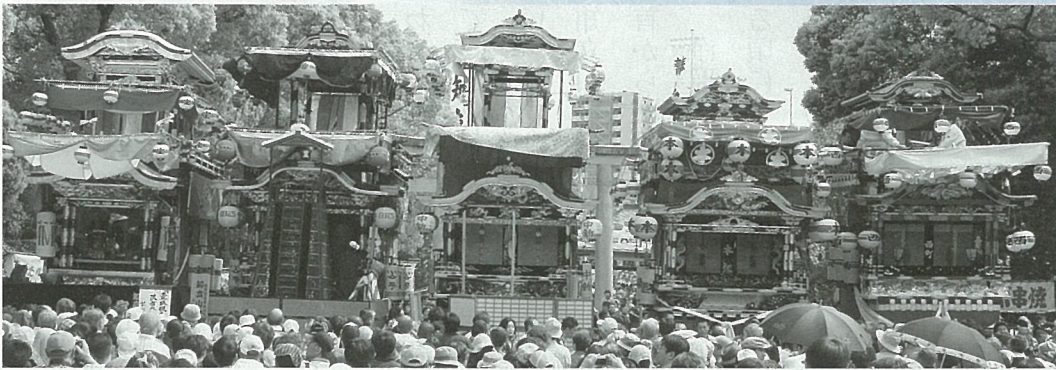
竹本義太夫が近松門左衛門と組んで、元禄に入る頃、それまでの古い浄瑠璃節を集大成し、義太夫節を編み出し、近松が新しい作品をどんどん生み出して隆盛した。享保末頃までには、古(古流)浄瑠璃は姿を消し、義太夫節が当流(今流)として専ら行われるようになり、人形浄瑠璃と言えば、義太夫節操りをいうようになり、さらに、義太夫節操りの中で、最後まで残った專業座が「文楽座」だったので、義太夫節人形浄瑠璃が、文楽と呼ばれるようになったのである。近松の頃までは、まだ一人遣いで、江戸系・尾張系の三人遣いが元禄頃から、文楽式の三人遣いは、知立では、宝暦の頃から行われ、現在に続く。山車の前棚(前戸屋)で行う文楽だから、山車文楽という。

(人形芸能史研究所長 加納克己)

〔昭和四一〜二年に卒業論文のため、知立の文楽かしら等を調べ、以後、全国各地の首を調査。首のある程度の年代判定が出来るまでになった。四十数年ぶりの調査で今回の発見となった〕

民俗部会「知立まつりの調査」

知立まつりと伝統



知立まつりはからくり人形と文楽を上演する山車が登場することです。ところが、その山車は隔年にある本まつりの時だけ曳きだされます。それは江戸時代に刈谷城下と交替で祭礼を行ってきた伝統を頑なに守るからです。

知立は東海道の宿場町として江戸時代に発展してきました。ここの氏神である知立神社は三河二宮に列せられる由緒があります。現在の知立まつりは江戸時代における都市祭礼の伝統を残しています。また、近隣の旧宿場町でも独特な祭礼が繰り広げられました。東隣りの矢作宿西隣りになる鳴海宿でも山車は祭りに登場しますが、それぞれ形態や曳行方法は異なっています。それは、長い時間を要して

知立独自の魅力ある山車祭礼を作り上げていった結果でした。

江戸時代には四町（本町、中町、西町、山町）が山車、残りの刈谷道（現宝町）は獅子舞を祭礼に出していました。その山車構造も二層造で、唐波風の屋根を四本柱で支えた吹き抜きで、正面下にも前戸屋と呼ばれる棚があります。その屋根下でからくり人形、前戸屋では三人遣いの人形を四町内ともに演じていました。それらの創始も実際のところ詳らかではありませんが、古浄瑠璃の首が発見されたことにより見直しが必要となってきました。一つの山車で両者の人形を演ずることは、尾張地方などに分布する山車の大山から影響を受けていると考えられますので、これからも注目しなくてはなりません。

人形芸能ばかりに目が行きがちの知立まつりですが、その行事や組織など見逃せない内容も少なくありません。例えば神社とも関係がある祭り当番町、各町祭り惣代、囃子連、梶（楫・揖）棒連などです。それぞれ祭り前の宿開きから稽古上げまで、民俗色が濃い内容の行事を含みながら本番を迎えます。なかでも稽古上げで囃子の成果を披露する場を設けていることは、人々の祭りへの熱い思いと拘りが表れた結果だといえます。山車が後梶の梶（楫・揖）方により、流暢な囃子「神舞」の音とともに宮入する頃、祭りは最高潮に達します。

このように知立まつりは多くの人々の努力により、次世代へ伝えるため時と共に様々な努力が繰り返されてきました。謎の多い知立まつりを少しでも明らかにするため調査を続けたいと思います。ご協力をお願いいたします。

（民俗部会 部会長 鬼頭秀明）

活動記録

(平成23年9月～24年8月26日現在)
会議・調査

◎編さん委員会

24年8月1日

◎編集委員会

23年9月2日、12月11日、24年3月30日、6月29日

◎部会

◇考古部会

23年9月4日、12月18日、24年4月15日、6月24日

◇古代中世部会

23年10月7日(旧東海道筋宿場周辺巡検含む)、12月16日、24年3月30日、5月11日(八橋周辺巡検含む)、7月13日

◇近代現代部会

23年9月11日、11月3日、24年1月22日、4月7日、6月30日

◇民俗部会

○地区間き取り調査関係

23年9月25日(来迎寺第二回)、10月18日(会議)、11月19日(八ツ田町第一回)、12月10日(八ツ田町第二回)、24年2月12日(新林町第一回)、3月4日(新林町第二回)、7月8日(谷田町第一回)、8月26日(谷田町第二回)

○まつり関連

〔知立まつり関連〕

23年12月4・19日、24年1月28日、2月10・27日、3月24・25・31日、4月1・5・8・13・14・23・25・29日、5月1・2・3日

〔秋葉社祭礼関係〕

24年6月23日、7月21日、8月24日
〔土御前社祭礼〕 8月26日

◇自然部会

23年9月10日、9月17日、10月1日、10月2日、11月15日、12月10・17日、24年1月7日、1月21日、3月9・31日、4月7・15日、5月19日、6月10・23日、7月22・28日、8月18日

◇文化財関連

24年2月10日(文化財委員会準備会議)、4月8日(山車の墨書など確認)、4月15日(西町山車実測調査)・21日(知立神社木彫蛙の調査)、7月20日(第一回文化財委員会)・28日(弘願坊建築調査)

○人形かしら調査

23年7月～24年11月(計10回)

○文化財悉皆調査

23年10月20・28日、11月12・25・29日、12月1・2・14・16日、24年1月13・18・27・31日、2月5・7・22・29日、3月6日

資料・情報収集について

知立町全図



「知立町全図」 昭和前期

地域に関する古い資料を探しています。例えば、代々伝わる古文書や写真、地図、知立町時代の役場或いは町内会文書などがありましたらご連絡下さい。または、戦時中のことや古い街並みなどについての情報がありましたら、お知らせ願います。



昔の街並み写真

編集後記

「市史だより」も第3号となりました。今回は部会関連の先生方からの報告をいただきました。また、市民の皆様方には動物の目撃情報、文化財調査や知立まつり、昔の資料提供など、たくさんのご協力をいただいております。紙面をお借りして感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくご教示・ご協力お願い致します。

お問い合わせ

知立市教育委員会文化課市史編さん係

〒四七二ー〇〇五三

知立市南新地二丁目三ー三

歴史民俗資料館内

TEL 〇五六六ー八三一六七八九

FAX 〇五六六ー八三一六六七五

(図書館・資料館・市史編さん係共通)

E-Mail sisi-hensan@city.chiryu.

lg.jp

新編知立市史だより第三号

平成24年10月1日発行

発行 知立市教育委員会文化課

市史編さん係